

運動不足だと自覚したのは、駅の階段を上っただけで息が切れた朝だった。

（このままじゃまずいかも）

体重計の数字は、もうずっと見ないふりを続けてきた。けれど鏡に映る自分のお腹まわりは、そろそろ言い訳がきかなくなっている。何か始めなきゃと思っても、激しい運動は続かない。

そんな私の目に留まったのが『初心者歓迎・マンツーマン体験レッスン』というヨガスタジオの広告だった。

（ヨガ……！）

ヨガならゆっくりだし、ダイエットにもいいって聞く。

ジムみたいに人の目を気にしないでいいマンツーマンなら、運動音痴で人見知りの私でもなんとか続

けられるかもしれない。そう思って、ネットの予約フォームをおそるおそる開いた。

氏名、電話番号、メールアドレス。そのあたりは、なんとか埋められた。次に「ご希望のコース」という欄があって、『体験マンツーマン（60分）』にチェックを入れる。『ご希望の日時』は、仕事が休みの土曜日の午前中を選んだ。

「それから、女性の先生を希望します、と……！」

インストラクターの希望性別のところで、『女性希望』と押して送信ボタンを押した。

予約確認のメールで『ご希望承りました』と返ってきて、私はすでに大きなことをやり遂げたような気分だった。

\* \* \* \* \*

予約の当日。

真新しいヨガマットを小脇に抱えて、私はそのスタジオの扉を押した。

木目の床に、ほんのり温かい照明。ふわりと漂うアロマの匂いが鼻をくすぐり、それだけでこわばっていた気持ちが少しほどける。

受付を済ませ、更衣室でレンタルのヨガウェアに着替える。それから受付の女性ににこやかに案内され、一番奥の個室スタジオへ通された。

防音のしっかりした窓のない静かな部屋だった。外の音は何も聞こえない。まるで世界から切り離された小さな箱みたいだった。

（ここでレッスンするんだ……！）

マットを広げ、正座して待つ。心臓がとくとくと控えめに鳴っている。

やがて、カチャリと音がして、扉が開いた。

「お待たせしました。本日担当させていただく遠山

深樹（しんき）です」

低くて穏やかで、やけにゆっくりした声だった。

顔を上げた私は、そのまま固まってしまった。

そこに立っていたのは、背の高い男の人だった。二十七、八くらいだろうか。整った顔立ちに、すらりと手足が長く、無駄な力の抜けた立ち姿がきれいで、黒いウェア越しにも引き締まった体のかたちがわかる。切れ長の目が静かにこちらを見下ろしている。

（え……男の人……？）

「あの……っ！」

声が裏返った。私はうろたえて、タオルをぎゅっと握りしめる。希望欄に確かに女性って書いたのに。混乱して口をぱくぱくさせている私を見て、遠山先生はすっと表情を曇らせた。

「女性の先生では……？」

「……失礼しました。女性の講師をご希望でしたか」

こくこくと頷く。先生は手元のタブレットを確認してから、深く頭を下げた。

「申し訳ありません。こちらの手配ミスです。ご希望を担当に共有できていませんでした」

頭を下げたまま、先生はしばらく動かなかった。

「今日担当する予定だった女性講師が、急遽対応できなくなりまして。その際の引き継ぎが不十分でした。お客様には何の落ちたびもありません。完全にスタジオ側の問題です」

淡々としているのに、言葉のひとつひとつが丁寧だった。言い訳をしない。責任の所在をはっきり口にして、それからまた静かに頭を下げる。

「本当に申し訳ありませんでした」

「い、いえ、あの、そんな、頭を上げてください…  
…っ」

こんなふうに謝られると、怒るところかこちらが恐縮してしまう。私は慌てて手を振った。先生はゆっくりと顔を上げると、困ったように少しだけ眉を下げた。その表情がなんだか叱られた大型犬みたいで、責める気持ちがすうっと萎んでいく。

「今日はこのままお帰りいただいても構いません。  
ただ——」

先生は静かに続けた。

「お詫びと言ってはなんですが、本日を含めて三回分のレッスンを無料にさせていただきます。それでも私の指導が合わないと感じられたら、遠慮なくおっしゃってください。女性講師の枠を改めて確保しますので」

（三回、無料……！）